

# SHOW HEYシネマルーム

★★★★

## 神に選ばれし無敵の男

配給／東北新社

2003 (平成15) 年5月13日鑑賞

<東宝東和試写室>

Data

監督：ヴェルナー・ヘルツォーク

出演：ティム・ロス／ヨウコ・アホ  
ラ／アンナ・ゴラーリ

### 👁️👁️ みどころ

この映画はタイトルどおり、「神に選ばれし無敵の男」である無類の力持ちのユダヤ人ジシェを主人公に描いたもの。これに対比される人物が、1932年の、抬頭しつつあるナチス党の中枢部に入り込もうとするハヌッセン。ドイツ人とユダヤ人との確執と対立は、その後ヒトラー政権の登場によって決定的となり、「ユダヤ民族の悲劇」が始まる。この映画は、その序章を「神に選ばれし無敵の男」を通して描いた、いかにも考えさせられる映画だ。「オカルトの館」のピアニストであるマルタ・ファーラが弾くベートーヴェンのピアノ協奏曲第3番第2楽章が心にしみて美しい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

#### <この物語は真実を基に描かれている>

ユダヤ人の神への信仰は、私たち日本人には到底理解できないほど強い。その教えの一つに、「神は36人のユダヤ人を選び、ユダヤの民のために働かせる」、というものがある。

この映画は、この教えにもとづいて神から選ばれた無敵の男、ユダヤ人ジシェ（ヨウコ・アホラ）を描いたものだ。

そしてジシェに対置されるもう1人の主人公がハヌッセン（ティム・ロス）。ハヌッセンは既に映画化されたこともある有名な人物とのことだが、もちろん日本人にはなじみが薄い。そういう意味でこの映画はユダヤ人やユダヤ教の教えをナチス抬頭期という時代背景の下で理解するには格好の作品であり、「神に選ばれし無敵の男」というタイトルは実にピッタリだ。

なお、この映画は2001年ヴェネチア国際映画祭正式出品作品。

冒頭、「この物語は真実を基に描かれている」との字幕が流れる。

時代は1932年。舞台はポーランド東部の小さな町。ナチスが抬頭しようとしている不安な時代だ。

### <怪力男 ジシェ>

ここに住み、鍛冶屋を営んでいるユダヤ人家族の長男ジシェは力持ち。チビだが頭のいい弟のベンジャミンとは大の仲良しだ。この2人の兄弟がちよつとしたトラブルに巻き込まれたことがきっかけとなり、サーカスの賞金稼ぎに出場したジシェは、たちまち「世界一の力持ち」にのしあがり、ベルリンへ行くことになった。

### <千里眼の男 ハヌッセン>

ジシェを雇ったのは、ベルリンにある「神秘（オカルト）の館」のオーナーであるハヌッセン（ティム・ロス）。「神秘（オカルト）の館」の観客の大半は映画スターなどの有名人や国家社会党（ナチス党）員だ。「神秘（オカルト）の館」では、夜ごとハヌッセンによる読心術や催眠術などのショーが繰り広げられていた。怪力男ジシェも、ユダヤ人であることを伏せて「シークフリート」を芸名に、「力自慢ショー」に出演した。ハヌッセンの野望はヒトラー政権下で重要なポストに就くことだ。このハヌッセンを「海の上のピアニスト」（1999年）で主演したティム・ロスがみごとに演じている。

### <ユダヤ人とドイツ人>

ナチスヒトラーが政権を獲得したのは1934年、そしてポーランドに進攻したのは1939年だ。したがって1932年は、ヒトラー抬頭の前夜の時代。そしてこの時代は、既にドイツ人とユダヤ人の関係は微妙。「神秘（オカルト）の館」の観客である国家社会党（ナチス党）の党员は、既にユダヤ人排斥主義そのものだ。

怪力男を演ずることがしっくりこないジシェは、ある日遂に舞台上で、自分はユダヤ人であることを観客に告白し、田舎へ帰る決心をした。しかしこれが逆に「現代のサムソン」と話題を呼び、「神秘（オカルト）の館」にはユダヤ人客の行列ができるほどの人気となった。

### <ピアニストマルタ>

「神秘（オカルト）の館」のショーでピアノを弾くのは、マルタ（アンナ・ゴラーリ）。彼女はハヌッセンに仕えているものの、彼女もポーランド人。ジシェはマルタに一目惚れだが、マルタもジシェに好意を持ちジシェに対してピアノフル・オーケストラをバックにしてピアノを弾くことが自分の夢だと語る。

### ＜あつと驚くハヌッセンの秘密＞

「真実の物語」として有名なのはハヌッセンのことで、映画「ハヌッセン」（1988年）をはじめ、これまでもハヌッセンを題材にした映画は撮られているとのこと。しかし、このハヌッセンと共に数奇な運命をたどった怪力男ジシェを描いたのは、この映画がはじめてということだ。なぜハヌッセンを描いた映画はこれまでいくつかあったのか？それは、このハヌッセンという人物にはあつと驚く秘密があったからだ。もともと「それを言っちゃあ、おしまい」なので、ここでは触れることはできないが・・・。

とにかくこのハヌッセンという人物はナチスの中枢部とも人脈をもち、ヒトラー政権ができれば、オカルト省の大臣になることが確実視されるほどにのし上がっていたのだ。

### ＜ベートーヴェンのピアノ協奏曲第3番＞

この映画ではジシェのイキな取りはからいによって、マルタの夢が1度だけ実現する。すなわちフル・オーケストラをバックに彼女がベートーヴェンの「ピアノ協奏曲第3番の第2楽章」を演奏するのだ。

私は小さい時から音楽は何でも好きで、大学時代はラジオづけの生活だったうえ、クラシックのレコードも貧しい小遣いの中で少しずつ買い、スリきれるほどよく聴いていた。そして大学2回生の夏、音大のピアノ科の彼女と付き合っていたが、その時彼女からベートーヴェンのピアノ協奏曲第3番のよさを聞き、早速購入した。ベートーヴェンのピアノ協奏曲第5番「皇帝」は誰でも知っているが、3番はタイトルのないもので、あまり有名ではないが、第1楽章は無茶苦茶カッコイイもの。しかし第2楽章は静かで地味な印象が強かった。ところがスクリーンの中でマルタが弾く、その第2楽章の静かなピアノだけの旋律が始まると、思わず身を乗り出して聴き惚れてしまった。

パンフレットによると、マルタを演じた世界的に有名なピアニストであるアンナ・ゴラーリに対して、ヴェルナー・ヘルツォーク監督は直接手紙を送り、「あなたほど情熱的に、内に秘めた感情を曲に込められる人を私は知りません」と強引に口説いて、この映画への出演を承諾させたとのことだ。映画を観たあと、私はあらためて久しぶりに昔集めたLPレコードからピアノ協奏曲第3番を聴くことになった。

2003（平成15）年5月14日記